令和３年度第２回県北広域振興圏地域運営委員会議　会議録

日時：令和３年 12 月２日（木）13:30～16:10
場所：久慈地区合同庁舎６階大会議室及び
　　二戸地区合同庁舎２階 AB 会議室

１　開会

２　挨拶

【高橋局長】

本日は御多用の中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。今年度は感染症対策としまして、会場を久慈と二戸に分けて開催しております。オンラインで結んでおりますが、御了承をお願いいたします。

さて、県北管内におきましては、７月に一戸町の御所野遺跡を含む北海道・北東北の縄文遺跡群が、待望の世界文化遺産に登録されたところです。また、12 月 18 日には三陸沿岸道路が全線開通を迎えます。前回、今年度の方向性を御説明申し上げましたが、私たちが考えている県北地域における２つの大きなチャンスが現実のものになってきているということで、コロナ禍で取組が出来ない部分もありますが、今後もこういった御所野遺跡や三陸沿岸道路を活用して取組を進める必要があると考えております。

一方で前回皆様からもお話がありましたが、県北地域の大きな課題として、県の平均を超える人口減少が進んでいるということ、併せて所得が県平均より低いといったことで所得の向上を図る必要があると認識しているところです。本日はその辺りについても御説明を申し上げたいと思っておりますが、いずれ県北圏域には、先ほどの御所野遺跡をはじめ豊かな地域資源がありますので、それらを磨き上げながら地域の活性化を図っていく必要があると考えているところでございます。

また、新型コロナウイルス感染症については、県内では 20 日ほど前に１件の新規感染者が確認されましたが県外の方ということで、概ね２ヶ月くらい県内の人の感染確認はない状況でございます。全国の状況を見ても、1 日に 200 人以下が続いているということで、現状としては全国的にも感染リスクは低い状況というところですが、昨今、オミクロン株という新しい変異株が世界的には猛威を振るいつつあり、国内でも確認されてきているという状況です。ただ、現状、日本国内はまだそこまで拡大していない状況ですし、岩手県は２ヶ月以上感染者がないという状況ですので、今がチャンスと知事もお話されておりますけれども、社会経済活動もしっかり進めていくチャンスにあるというところでございます。県としても、感染拡大防止はもちろんですが、社会経済活動の両立を図るために取り組んで参りたいと考

えておりますので、皆様にも御協力をお願いします。

現在、県では 12 月議会が開催されていますが、併せて予算編成も進められておりまして、県北広域振興局におきましても来年度の方向性を考えているところです。本日は、現段階での私たちの来年度どうするかという考えを説明させていただき、それらについて皆様から御意見を頂戴できればと考えております。

なお、地域運営委員の皆様の任期は２年となっておりまして、今年度末までとなってございます。会議としてはもしかすると本日が最後かもしれないというところで、まだこれから始めるところではございますが、様々な観点からこれまで貴重な御意見を頂戴したということについて、この場をお借りして改めて感謝を申し上げたいと思います。本日も忌憚のない御意見を頂戴できればと思います。想い残すことがないようにお願いできればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

３　議事

【高橋企画推進課長】

〈資料１についての説明〉

【高橋局長】

前回の地域委員会議での御意見、御要望に対して、新たな部分の説明を申し上げました。何か御質問や御不明な点などありましたら、御発言をいただきたいと思いますがよろしいでしょうか。

それでは、こういった新しい部分も含めて取り組んで参りたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

次に、議事の二つ目ですが、令和４年度県北広域振興局の施策方針についてを議題とさせていただきます。

まず、進め方ですが、初めに事務局から資料に基づいて説明させていただきまして、その後、委員の皆様から順番に１人３分程度で御意見等をお聞かせいただければと考えております。御発言をいただく順番ですが、今回、資料の出席者名簿の裏面に発言順ということで、誠に勝手ながらこちらの方で順番付けをさせていただきましたので、この順に御発言をいただきたいと考えております。お２人から３人に御発言をいただいたところで事務局の方からコメント等をさせていただきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

それでは最初に、事務局から説明を申し上げます。

【高橋企画推進課長】

〈資料２についての説明〉

【高橋局長】

説明申し上げたことにつきまして、短い時間で恐縮ですけれども、委員の皆様からお 1 人３分程度で御発言をお願いしたいと思います。

【川代委員】

11 月 30 日に食生活改善推進委員と保健推進連絡協議会で、ゲートキーパーの研修をしてまいりました。コロナ禍でしたが、赤平美津子先生に２年続けて来ていただきまして、寄り添う心というゲートキーパーを育てる研修を、午前と午後の２回に分けて研修して参りました。今回改めて思ったのは、働き盛りの男性の自殺が多いということですが、こういう研修会に出てくるのは女性がほとんどです。改めて、女性の社会に参加する機会の多さっていうのを考えた反面、じゃあ働き盛りの男性に寄り添うにはどのようなアプローチが必要なのかと考えさせられておりました。60 代になると、こういったボランティア活動に参加される女性が多くて、そういったところで地域に戻っていった時に、地域の皆さんに寄り添う、様子に気付く、とにかく悩みに寄り添えるような人材を育てたいということで、この研修をしているのですが、どこまでできるかという具体的なことよりも、そういうことを続けることが大事なのではないかと思っています。これからも行政と一体となって、ゲートキーパー、そして地域の中に入っていくという活動を続けて参りたいと思っております。

改めて、地域ということを考えたときに、女性の働き方や育児休暇などに対して、保育園などの手助けも大事だと思うのですが、収入も安定して十分に長い育休を取っていただけるお母様方がいらしたら、地域にボランティアとして何かしら関連性を持っていただいて、それが例えば町内の運営なのか、御自分の好きなことや興味のあることに関する行政のボランティアなのか、そこは御自身の選択肢だと思いますが、そういった中で、第２のスキルというか、職場以外の人間関係を地域に築いていただいて、将来そのお母様たちが、30 歳 40 歳、50 歳 60 歳になったときに、自分も地域に入ってくし、次の世代の方も地域の活動に引込んでいく力、そういったものを育てることができるならば、そういった援助やプランを、例えば保健センターでこういったことも各地域の市民センターで行っていますよというようなことを、乳幼児の 3 ヶ月健診の場で発信をしていくというような工夫もあってもいいのかなと感じております。

どこまで届くか分からないのですが、保健推進と食生活、心と体の健康については、これからも委員会全体で取り組んで参りたいと思っております。

【中田委員】

女性活躍ということで、私は福祉施設をやっておりますが、女性の割合は全体の 75％とな

っています。その中でも役職をもっている女性職員は半分を占めます。やはり女性が活躍する職場であると思っておりますので、できるだけ若い方が働きながら子育てができるような働きやすい職場を作っていくことが大切ということで、職員の方ともいろいろ話し合いながら、行政の方からも勧めもございまして、くるみんなどの取得を目指しながらやったのですが、取り組んだ職員の方からの声で、苦労してやってきてもあまり意味を感じないというような意見がありました。それはどういうことなのかと思って確認したところ、それを取得することによってたくさんの人が働きやすくなるのはもちろんですが、人が足りない中の人員確保にも繋がったりということになるのかなと思ったのですが、くるみんという意味さえ知らない方の方が多い。行政の方で取得してって言うだけでなく、もっともっとどういうものなのかというのを PR していただければありがたいという声が出て参りました。ネットの方にありますよということで調べてみたのですが、辿り着くのにかなりの手間がかかるような、簡単に見れないような場所にあったものですから、もっともっと一般の人が分かるような形で PR をしていただきたいなと思っております。そうするとやっぱり職員もそれを生き甲斐に頑張れると思いますし、他の職場の方々も向こうでやるなら私たちも取り組んでみようというような、地域全体で女性が働きやすいような職場、活躍できるような環境が整っていければありがたいなと思っております。そういう意見が聞かれましたので、一緒になって進めるのは良いのですが、ぜひ一緒にそれを広報活動、PR する場があればとてもありがたいなと思っております。

今子育てをしながら、また、お休みをしながら働いてくれている職員は将来の宝だと思っておりますので、私たちも今後とも支援をしていきたいと思いますが、これも地域全体で支えていただければ、また、応援していただけるような環境があれば、もっともっと頑張れる、女性が活躍できる地域になるのではないかなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【野田委員】

先ほど中田委員が、女性活躍についての老人ホームの現状をお伝えいただきましたので、私からは若者の方の PR も含めて、提言させていただきます。

今週の土曜日に公開になると思うのですが、洋野町広報が人口減少を特集しておりまして、今回この特集が 16 ページに及んでおります。その中に、私たちの取組が載っておりますので是非御覧いただければと思います。何をやっているかというと、岩手県の本庁の事業で、地域コミュニティの計画を立てまして、3 年間で地域コミュニティをどうにかして、福祉の力で町おこししていこうという取組を行っております。実際その取組の一つが、大野高校と岩手県立大学の社会福祉学部の宮城先生と、そのゼミの岩部さんという学生さん、そして地元の私達みちのく大寿会の 3 者がタックを組んで、高校生に洋野町大野地区の魅力を伝えるプ

ログラムを今行っております。今、福祉教育のプログラムを作り、それを大野高校２年生の８名に体験してもらってます。今回プログラムを作成するということで、高校２年生の８名が昔の大野のことを知るということで、大野図書館の木村さんから、大野の歴史を歩きながら説明を受けました。２回目は、私の方から大野地区にある社会資源を一緒に歩きながら見てきました。そして３回目は、高校生と一緒に死を考えるということで、私の生前葬、模擬葬儀をやりました。高校生と一緒に死を体験することで、今自分が生きていることには意味があるんだ、そして今高校生だからどんどん地域に目を向けたりとか、自分でやることを考えようというプログラムをやりました。この取組を大野高校の魅力化の一つに持っていきたいと考え、福祉教育を今推し進めております。その内容が今回の洋野町の広報に見開き１ページで載っておりますので、ぜひ御覧いただければと思っております。

【菊地保健福祉部長】

川代委員から、心と体の健康のために食生活改善推進員さんと保健推進員さんと一緒になって、研修して取り組んでいるというお話をいただきまして、ありがとうございます。２つの団体の皆様には、日頃から住民の食生活の改善や健康診断の受診推奨のほか、県北圏域では自殺者も多いものですから、そういったゲートキーパーの要請、心と体の健康のために、日々取り組んでいただきましてありがとうございます。

御指摘のように、確かに女性が多い研修でございまして、男性の参加が少ないんですけれど、女性の方から男性の方に対して参加を促していただき、こちらも普及啓発等頑張っていきたいと思っておりましたので、いろいろ相談しながらやっていきたいと思います。御提案のありました３か月の乳幼児健診などと合わせて、ボランティアに関わって地域で頑張っていくような、今自分が関わってること以外のことにも、地域を良くするために情報発信や普及啓発をしていくといった取組の必要性等についてもアイデアをいただきましたので、これから少し考えて検討していきたいと思います。

それから中田委員の方から女性が働きやすいように、或いは子育てしやすいように職場の方で取り組んでいるということで、情報発信や広報活動みたいなところが必要ではないかというような御意見をいただきました。どのようなことができるか、これから少し考えていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

野田委員の方から地域づくりとか、教育機関等と連携して福祉のことを地域の皆さんに広げる、理解してもらってそれがボディーブローのように帰ってきてくれたり、或いはこれからを担う人材になっていくのではないかということで、広報の方も一生懸命やっていただきましてありがとうございます。洋野町の広報誌も拝見いたしますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

【酒井産業振興室長】

資料にもあったとおり、二戸地域含めた県北局管内の問題意識として、卒業した高校生がその次に行く高等教育機関が少ないということもあり、就職や進学に伴って、約７割の高校生が、毎年管外に流出しているというところがございます。先ほど野田委員からもお話あったとおり、「出たい」という気持ちをもった子供たちを留めるというのが難しいところもございますので、出ていった後でも戻ってこれるようにするためのきっかけづくりを目的として、この久慈市内でも一度県外に出て働いた後、何らかのきっかけでUターンされて、起業されてるような方々とか、家業を継がれて今頑張ってる方々がいらっしゃるので、そういった方々をゲストスピーカーとしてお招きしまして、希望する高校生とざっくばらんにコーヒーを片手に語り合うというような形で、Uターン経験者とのトークセッションという事業を昨年度から行っております。今年度も、10 月と 11 月に、会場はヨムノスのスタンドヒビキという、こちらも U ターンされた方が起業されたところですけども、そちらを会場にして開催させていただきました。10 月と 11 月、ゲストスピーカーの方はそれぞれ違うんですけれども、やはり実際にどういう思いで都会に出たとか、どういう思いで戻ってきたとかを含めて、非常にざっくばらんにお話をしていただいて、また時折高校生の意見も聞きながら、いろんな形で進めさせていただいたところです。話し合いの中でも、自分は高校性のころ、久慈好きでしたかってゲストスピーカーの方が互いに話し合うんですけど、いや僕嫌いでしたという話も出ていて、じゃあなぜ戻ってきたんですかというところもお話していただいて、単に昔から私久慈好きでしたって人ではなくて、何かきっかけがあって、外に出たからこそ戻って来たんですよっていう話を高校生にすることによって、一つの気付きのきっかけになるような事業として実施できたかなと思っておりまして、こういったものは少し別の形のアプローチということで、来年度以降も継続していければいいかなと考えているところです。事例の一つとして御紹介させていただきます。

【内野澤委員】

私は、ホタテ養殖と定置網に従事しております。近年、秋サケの不漁が続き、経営がかなり厳しくなっています。サケ資源が回復するための取組や対策を行い、収入が安定すれば、若者の担い手確保や人材育成も上手く進むのではないかと考えます。今のままでは、一緒に漁師をやろうとはなかなか若者に言えません。

女性活躍の件ですが、女性が職場で活躍できるように、家庭で家事の分担や子育てなど、率先して男性も手伝うようにすれば、ますます頑張れるのではないでしょうか。短いですが、以上です。

【野場委員】

漁協女性部について。私が部長を務めてから８年になりますが、部員数が 30 名減少しています。高齢化ということもありまして、留めるのはなかなか難しく、新しい人を加入させようと思いましても加入してくれる方が見つかりません。色々勧誘をしてみましたけどかなり難しい状況で、もし新規に加入できる方がいるとしたら、ここ数年何人かづつ、今年も４人新規漁業就業者育成事業で新しく漁業者の権利を得ている方がいます、育成事業で新規に漁業者になった方には独身の方もいますが、妻帯者の方もいます妻でなくても家族の女性なら女性部員になれるので、育成事業の規約の中に新規約を加えることは難しいかもしれませんが、女性部の組織・活動があることを紹介していただける機会があったらいいのかなあと思います。

あと、私事で恐縮ですが、今年主人を亡くしたのですが、準組合員だった主人でしたが、長男は父親と同じように漁業を継ぐものだと思い、大学卒業と同時に船舶の免許を取得し、鮑、ウニの時は船に同乗し手伝いをしてきました。自分の仕事の休みの日でないと、海仕事の練習が出来ない、もちろん鮑、ウニ漁の時に一緒に行ったからといって、タモもカギも下して練習も出来ない。密漁じゃないかとか、違反じゃないかとか、冗談まじりの言葉をかけられる。大人は笑って言い返せますが、若者はそういうふうに言われると、もう嫌い、そんな事を言われてまでも練習が必要かというような状況になって実際、親がなくなってから漁業権を引き継ぐことはできるが、40 歳半ばになって全くの一年生から漁師になって、高校生、大学生を持った息子が漁業で生活を営んでいくのはかなり難しいことです。ましては近年のこの海の状況では困難を極めるということで、漁師になることは断念しました。後継者を育てるのだったら、そういう漁業の経験や練習の機会を本気で考えて貰いたいと思います。事務的でなく、本当に生活できる漁業を地元にいても経験させる場所、機会を設けることを進めて頂きたいと思います。漁業者がいなくなると、海の近くに住んでいても海に孫を連れて行って遊ぶというのも気が引けるような、密漁するわけでもないのにそのように見られているような、なんとも複雑な寂しい気持ちになります。有料化であっても、磯浜漁とかツブ貝拾いしながら遊べるような昔のように楽しい海になっていってほしいものだと希望しております。以上です。

【森山水産部長】

まず内野澤委員からサケ資源の回復ということでお話をいただきましたけども、サケをはじめ、今現在、本県の主要魚種と言われるサケ、サンマ、スルメイカ等の魚種が不漁という大変厳しい状況がございます。県としましては、この不漁対策に対しては、サケをはじめとする資源の造成をより進めること、それから今獲れている魚を利活用、加工するということ、それから養殖業の振興を図っていくという、三つの柱で考えております。それぞれの施策を打っているところでございますが、サケについては自然環境の変化ということで、恐らくそ

ういう要因があろうかと思いますけども、漁獲量が震災前の 10 分の 1 といった非常に厳しい状況にございまして、温暖化の対策として、温かい海水温でも回帰できるような資源造成といったことですとか、あとは餌の改良を行って強い稚魚の生産ですとか、そういった取組を今しているところでございます。そういった試験研究は結構時間がかかることではあるんですけども、関係団体とも一緒になって、サケ資源の造成について、対策を今はしているところでございます。

それから野場委員からお話ありました、女性部の活動に関してですが、漁村地域のコミュニティというのは、女性の方々が重要な役割を担っているわけでして、そういった女性部の方々が中心になって浜の活動をされているということは、非常に意義があることだと考えてございます。コロナの前は、例えば浜料理の研究ですとかお振舞とか、そういった活動もできたわけなんですけども、コロナ禍においては、そういった活動も厳しい状態ということで、早く収束することを願っているところでございますけども、新しい部員の加入ということに関しては、若い方々が関心を持っていただけるような取組、そういったことが一つの一手になるのかなと考えます。県としては、女性グループの勉強会ですとか、視察研修、そういった活動経費への支援、或いは加工品の開発、そういったスキルアップのためのセミナーや交流会、そういったものについての開催の経費についても支援する制度がございますので、そういったことも活用していただきながら、より一層魅力的な活動をしていただく一助にしていただければと思います。

それから、漁業担い手の確保のお話に通ずると思うんですけども、なかなか現場での漁業体験なり、そういったことをする場がないという御提言でしたけども、令和元年に岩手県水産アカデミーという研修機関を作りました。今 3 期目ですので、これまで 20 数名の方が、そこで学んで、現場の第一線で活躍されておりますけども、そこでは漁業者の方の元に着いて、実際の漁をしながら、現場での技術習得、それから水産技術センターなどでの座学、例えば漁業の制度や資源管理のための取組、船の免許などを習得できるカリキュラムを揃えておりますので、そういった機関を活用していただきながら、現場に合った技術の習得をしていただきたいと考えてございます。

また、小・中学生に対しても、漁業体験など、そういった取組をしておりまして、海に親しんでもらいながら、将来の漁業者の育成ということにも取り組んでいるところでございますので、今後とも御協力いただきたいと思います。以上です。

【谷地委員】

今回は、林業の話と、会社の形についてお話しさせていただきます。

林業施策、進め方についていろんなところで御支援いただきました。また、人材育成等々含めて、木の仕事協議会というのがございますけども、そちらの方でも取組の支援をいただ

いておりました。コロナ禍ですが昨年からいろいろ対策をとりながら、久慈の高校生の皆さんに木材、林業含めてPRを行っておりました。また、県で行っている林業アカデミーとも連携を取りながら、人材の育成を進めて、また、就業先との受入というところを上手く連携させながら、久慈地域の林業を行っていければと思っております。

資料の方にも林業イノベーションとありますが、確かに今機械化が進んできて、デジタルを使って、見えないものを見えるようにしていくような段階が来たのかなと思っていました。ただ、実際にいろんな技術が出てきているわけですから、使いこなせる人材もまだまだ不足しているわけで、こういったのも含めて、林業だけじゃなくて農業、水産業もDXを進めていくということですので、一緒になって連携していければいいのかなと思います。もっといくとワーケーションなんかでそういったことが得意な人材がこの地域に来て、一緒に連携しながら解決していく仕組みづくりまで含めて考えていただければ、地域の魅力も発信できるし、地域で働く意味も、高度技術を持った人材の育成もできていくのかなと思います。そうすると高等教育、大学まで行った学生さんたちが林業に入ったり、一次産業でデジタルを使って生産していくところと連携していくことができるんじゃないかなと思ってます。是非ともそういった部分で、それぞれで区切るのではなく、一緒になって連携していける仕組みをこういった大きな場所でせっかくですので、作っていただきたいなと思いました。

また、当社も木炭を作ってますので、木炭作りでいけば、カーボンニュートラル。岩手県も、二酸化炭素ゼロということで進めています。最近よく考えるのが、木炭を使って、地域社会での課題を解決することができないかなと考えていました。食品関係、また、森林を見ても、まだまだ使えるのに余ってるなとか、そういうとこでも炭素化して、固定化して、それを農業、水産業も含めてですね、連携しながら使っていき、固定化をしていく場所を作っていくことによって、さらに二酸化炭素を排出せず、炭素の固定化をして、連携しながら改善に繋げていくこともできるんじゃないかなというふうに思ってます。そういった意味で、異業種の交流も含めてやっていきたいと思います。木炭づくりはそんな難しいことではなく、結構私の会社のそうですし、他の業者さんもそうですけども、障害者の雇用、また高齢者の雇用の生み場所でもありますので、是非ともそういったところで、福祉の連携も含めて行くことできます。一緒になってこちらもやっていければと思っていました。

企業の経営者としての考えですけども、先ほど川代さんからお話あった、働き盛りの男性の人たちの自殺が多い地域だと。これはやはり考えていかなければならないことだなと思いました。前回もお話させていただきましたが、健康経営、健康管理をまず進めていただけたらいいなと。まだまだ足りないなと思います。今のようなお話を、是非とも当社等を踏まえてお話させていただければありがたいと思うし、やらない理由じゃなくてどうやってやれるかというのをつくりながら、県の皆さんや市町村も含めて、御相談させていただきながら、いくらでも解決できると思います。そういったところで何かできないかなというような、み

んなで解決していける場所を作っていければ良いなと思いますので、是非ともよろしくお願いいたしたいと思います。たまたま昨日そんな話をしたところだったんです。知り合いの方、一つ下の後輩が癌で亡くなったんですが、その後輩の他にどういう人が亡くなってるかというと自殺してる人が多いし、久慈の同級生の中でも結構いる。心が弱いからだとかだけじゃなくて、どうやったらそれを解決できるかっていうところを本気になって考えないと、ますます人口減少してくるという社会ですから、今働いている人達も救って取りこぼさないようにしていかなきゃなと、今日のお話聞いて感じたところでした。以上です。

【山下委員】

私の方からは、資料２の 14 ページの部分で、環境を守りというところの廃棄物の教育のところですが、ごみと言うともう要らないものとなりますけど、資源という考え方で再利用をどうにかできないかなと常に考えておりまして、各産業別に排出される廃棄物を別な分野で利用できないかという部分に興味があります。分かりやすく言うと、キャベツで出荷できないような規格をウニ食べさせるというニュースを最近皆さん耳にしてるかと思いますけど、そういう捉え方で、例えばキャベツ農家では捨てるしかないところを、ウニの分野では効果的だとか、そういうものを結びつけるようなキーワードで、何か施策を考えていただければなと思います。この環境フェスティバルや出前事業をそのきっかけづくりの場として、高校生の方々に、各産業でこういう要らないものが年間これぐらいの量と金額が出るんだよというところを示して、若い柔軟な発想をもっている人たちからアイデアを出してもらって、そこからヒントを得て、実現可能性があるようなものをチョイスして、そこで産学共同開発の大学の教授とか学生さんたちと共同開発をして、具体的に展開を図るとか、そしてそれを産業として起こしていくというような道筋を、優良事例一つでも二つでも挙げていただければ、追随するものがどんどん出てくるんじゃないかなと最近思っていました。いろんな分野でもあるかと思いますので、そういったところのきっかけ作りを是非やっていただきたいなと思ってました。

次の 15 ページも似たような発想なんですけど、昔は関東は給料が高いけど、物価が高いから田舎の方が暮らしやすいよというような、私が若い頃はそういう認識があったんですけど、今は物価はどこでも高い感じで、今では暮らしやすいというような感覚ではなく、暮らしにくいというのが今のテーマでしょうけど。そこで若い人たち、特に子育てをしている世代の人たちに、再生可能エネルギー、わかりやすく言うと電気代ですね。この電気代を岩手の特典ということで、若い子育て世代とかそういうところに再生可能エネルギーの電気代を割り引く。岩手割りみたいな特典というか、要は給料が少ないから暮らしづらいというところも要因の一つあるので、支給がなかなか上がってこないのであれば、生活の中でかかる経費という部分、電気代を軽減してあげるような施策という切り口でいくと、そのバランスが良く

なってくるんじゃないかなと思います。これは経営と同じような感覚で、個人の生活も経営の一つでしょうから、そこのところを岩手ならではの再生可能エネルギーで電気代を補填し、やはり収入もなかなか高くはなく、でも子育てをして頑張ろうという世代の負担軽減の一助になればなと考えていましたので、そういったところを何か仕組みを作っていただければありがたいんじゃないかなと感じました。以上です。

【及川林務部長】

まず木の仕事協議会さん、地元の製材業者さんなどで構成されておりますけども、高校生対象に就労体験をやっていただいております。大変意義のあることだと思っています。幸い、林業に関心のある生徒さんの学校だということもございますので、将来の定着、人材育成のきっかけになるんじゃないのかなと思っております。それが久慈にあるということで、大変力強い取組だと思いますので、今後とも支援して参りたいと思ってございます。

あとイノベーションの関係です。御存知の通り林業の方も機械化いろいろ進んでございます。それにつきましてもやっぱり若い人の力はどうしても必要ですし、DX とか一歩進んだその次の技術の部分では、やはり若い人が力を活かせる場がまだまだあるんじゃないかと思ってますので、それをきっかけにして、林業の方にも若い人を呼び込みたいと感じました。

あと、木炭ですけれども、基本的には炭を燃やすことで、それを商品化しているのが主ですけれども、提言ございました、燃やすだけですとなかなか、炭素固定には結びつかないところもあり、新たな商品開発の分野になると思いますが、食品とか、土壌改良とか、畜産でもいろいろと使い道ありますので、燃やす以外の使い方につきましては、ちょっと一緒になってできれば、何かこう商品化に結びつけられればと思ってございますので、今後ともよろしくお願いしたいと思います。以上です。

【加藤保健福祉環境センター長】

環境フェスティバルとか高校生を対象とした県境不法投棄事案の出前授業についてコメントいただきました。環境フェスティバルにつきましては、地域の環境団体の活動ですとか、ないしはその環境系の体験をしていただくという催しで、不法投棄事案の出前授業というのはその通りなんですけれども、日本で一番酷い不法投棄と言われたものを忘れさせないように伝承をしていくという目的で実施しています。山下委員の方から、ごみを資源にというようなお話がありましたけれども、実際に捨てればごみでも、使えば資源ということで、管内にはいろんな資源というのが多分あるんだと思います。例えばバイオマス発電ですとか、或いはメタン発酵ですとか、今まではごみとされていたものを資源として使う動きというのもありますので、ただ、高校生とか中学生でそういった視点っていうのがなかなか出てくるかというのが問題なんですけれども、大量に捨てられてるものを資源として転化するっていう

ものについては、その廃棄物業界としてもしっかり取り組んでいくべき問題であろうかなというふうに思っております。

【高橋企画推進課長】

再生可能エネルギーについては、地球温暖化、また 2011 年に東日本大震災津波が発生したというところから、再生可能エネルギーで電気を作るという動きが日本全体で広がってきたという状況です。当初は、やはり大手の企業が勝手に開発するという言い方が適切かどうかはありますが、事業を行って、地元にはほぼお金がおりないというような状況がしばらく続いていました。近年、市町村の再エネの計画の中に、そういった事業者が行うような再エネ事業を計画に位置づけると、そしてその自治体にとってどういうメリットがあるのかとか、或いはその地元の方とその事業者がいろいろ話し合いをした上で、地域振興策のような取組を行うということが近年少しずつ増えてきていると考えています。今後も様々な計画があると聞いておりますけれども、そういった地元にとってどういうメリットがあるのかと、そういう部分は自治体としても、積極的に検討していく必要があると考えています。

一方、住民の方にその電気代を安くという話もございました。これについては事業者が、電気を送電線等を通じて東北電力等に売るというのが基本になっていますが、一方で地域の新電力、こういったものが立ち上がってきてございます。その中には、その再生可能エネルギーを使って、なおかつある程度割安感があるものとか、そういうものもあると聞いています。そういう中で様々なメニューなどがあると思いますので、その辺りを県としてもしっかり情報収集、或いは勉強していきながら、どうすればその地域の人達にメリットが出てくるかという部分をしっかり検討して参りたいと考えています。

【藤織委員】

私は観光の PR やガイドの仕事をしてますので、その観点から資料２の９番と 11 番に関わる話をさせていただきます。

9 番の地元木材のところについて、林業は全然詳しくないんですけれども、久慈市は白樺の再生事業に取り組んでいるそうで、私も植樹に参加して子供たちと一緒に白樺の苗を植えさせていただいたりしました。ここには浄法寺の漆などの事業も書かれてるんですけれども、白樺のことは何もなかったので、確かに漆に比べたら利活用という部分では少し劣るのかもしれないですが、日本一の面積を誇っている平庭高原の白樺なので、ぜひ再生というか守っていくことも観光としても重要かなと思います。先日、10 月 31 日に EXIT っていうお笑い芸人の２人が久慈市に来て、白樺のところで写真を撮ってもらったんですけれども、お２人も楽しそうに写真を撮ってくださって、御自身のインスタグラムに上げてくださって、かなり反響もよかったので、綺麗な白樺を今後も観光客が見えるように、地元の方も誇りに思える

ようにしていっていただきたいなと思うところであります。

あと、11番の北岩手の魅力ある食材を生かした食産業についてですが、いろいろな食品のPRをされてるのはよく目にしますし、私も関わったりもするんですけれども、観光客の方に、地元の食材をなかなか食べられない、どこで食べられるのっていうのは結構聞かれます。例えば、山形村短角牛はどこで食べられるのかって聞かれると、食べられるお店が非常に少なくて、私たちも紹介が「うーん」となってしまうというのがあります。これからだと思いますが、久慈の養殖のギンザケとか非常に良いものだと思いますし、これからどんどんPRしていくと思うんですけれども、内外含めて地元の飲食店とかで取り扱ってもらえるように、初期の助成なのか、レシピの考案なのか、観光客がせっかく来たなら地元の久慈のもの食べたいという声に答えられるように、支援をどんどんしていって欲しいなと思います。ホテルの朝食で地元のものが出てきたりとか、あと食材とはまた違うんですけれども、久慈のまめぶも文化庁の食文化ストーリーの創出事業に選ばれて、大変話題性があるものだと思いますので、まめぶももっと市内で食べるところが増えればいいなと思うので、そのあたりのPRの方法も是非考えていただきたいと思います。以上です。

【古舘（英）委員】

まず世界遺産登録に関っては、振興局さん、周りの市町村さんと様々御協力いただきました。ありがとうございました。９月ごろの御所野の容れ込みは、ほとんど毎日、小中学生、或いは一般の方の研修やら修学旅行やらで満杯状態でした。ところが、緊急事態宣言等々で県が施設をシャットアウトしたもんですから、市町村もそれに倣ってシャットアウトした結果、全部キャンセルになりました。そういう意味で本当に残念だったなと思います。この１年と言いますか、登録なってからのここが本当は勝負だったかもしれないですが、結局来年度に持ち越すような感じになるんだろうなと思います。御所野の場合には、春夏秋冬に縄文の風景があります。他の施設にはないものだろうと思います。これは多分魅力なので、そういう意味で冬も良いですが、皆さんにいろいろ体験してもらうには、やっぱり春から秋までがベストシーズンだと思います。そういう意味で何か一周年イベントもあるということですから、お話を聞くだけじゃなくて、もっと実際に来て何か体験したり見たりっていうことが内容的に網羅されればいいのかなと期待しているところです。

一戸町と一緒にいろいろやってくださっていると思うんですけども、一般の町民としては、その受入体制はすごく遅いなと感じています。それは、如実にハード面で一番分かるかと思います。食べるところがないとか、道の駅もなかなか進まないなとか、様々あるんだろうと思います。或いは前の火葬場のところも、移転が決まったようですが、いつそれが始まるのか私もわからない。ソフト面では様々いろんなことをやられていると思います。今回もいろんなこと入れてくれてるようですから、それを期待したいと思います。

IGR で盛岡に時々行ってますが、青森鉄道なんかはやってることが凄いですね。青森の場合には、縄文遺跡が一つだけじゃなくてかなりあるので、確かに IGR さんとも御所野もやっていただいてはいるんですが、青森の PR の仕方がすごいなっていうことで逆に感化されているような感じです。負けないようにということではなく、一緒にやっていかなきゃならないんだろうなと思っております。これまでは来てもらうためということでやってきたと思いますが、どこの世界遺産でも１回行くと大体もういいやってなってしまうので、リピーターをどう呼び込むかというのがとても大事なテーマになるだろうと思います。幸い、この縄文という世界遺産は分からないことが多いわけです。他の世界遺産はこれから新しいことが分かるということはないですが、縄文の場合にはほとんどと言っていいくらい、御所野も２割ぐらいしか発掘していないんです。残りがまだまだあるわけで、そういった発掘もこれからやっていくんでしょうから、補助事業も県にも国にも援助して欲しいと思います。近年こんなふうに縄文の生活の暮らしが分かってきたのは、そういった技術的なことが分かってきて、前分からなかったことが分かってきたということがすごく大きいわけです。特に御所野の場合にはそういう実証実験などをやってきていて、ただ発掘して終わりじゃない。それはやっぱり魅力なんだろうと思います。だから、そういった新しく分かったことを皆さんに伝えていくのは我々のユネスコでやらなきゃいけないことだと思っていますが、そういったことを書き物にして PR していくようなことがリピーターを呼びいれる基になっていくんじゃないかなと思います。昨年、盛岡で縄文の企画展やりました。横浜、千葉市でもやりました。そういった世界遺産の PR は、継続してやっていく必要があると思います。盛岡でやったときも、御所野ってどこの話だ、何の話だというようなアンケートもあるわけです。やっぱり PR していかないといけないなと思っています。

あとは、岩手県に縄文の遺跡が 8,000 ぐらいあって全国一だということが岩手日報にも載りました。そういったことを考えると、この岩手の縄文遺跡を年代別に並べたり、いろんなやり方あると思うんですけども、世界遺産と絡めて、岩手の縄文ということをもっと PR できるんじゃないかなと思います。素晴らしい遺跡や貝塚、出土品もかなりありますから、そういったことをやるのはやっぱり県じゃないかなと思います。それと併せて、前にも話した世界遺産三つを一緒に首都圏等で PR して、岩手はこういう県なんだと PR するとがとても大事じゃないかなと思います。

あとユネスコなのでもう一つ言わせていただくと、SDGs という考え方や取組が、今テレビなどで取り上げられ今年は特にすごいなと思っていました。テレビの右上の方に、17 の目標のうちの何番ですとかって出ますよね。これはすごいことだなと思っております。スーパーに行けば、皆さん袋を持参していて、これぐらい以前と変わったということはあるんでしょうか。各市町村ではそういった SDGs の考え方を施策に生かして見直してるところだと思います。県もそうだったと思います。一戸町でもそういったことをやってて、今度の日曜日にユ

ネスコのセミナーをやります。町がこの SDGs でどんな施策をやるのか、そしてしかも縄文という人たちの考え方を取り入れた SDGs で見直していくというようなことを副町長からレクチャーを我々が受けて、それを普段の生活の中で何ができるかということを焦点を絞ってやっていこうと思っているところです。そういったところも振興局の方でも支援いただけたら良いなと思っております。以上です。

【酒井産業振興室長】

現状、平庭地区の白樺を生かしたものとして何か特別な事業をやっているかと言われると実際やっているわけではないですけれども、平庭地区は闘牛をはじめ、山形地区の重要な観光資源だということは十分認識しているところでして、ただ今現状として、平庭地区で取り組まれている様々な事業やイベントを久慈市とも連携しながら、観光地域としての PR とかはさせていただいてるところですので、こちらは引き続きさせていただきたいと思っています。

次に飲食店の関係で、地元の食材を地元で食べるような、何か促せる取組はできないかというお話でございましたけれども、個々のお店が何を売りにして商売されるかというところについては、個々のお店の方針というのもありますし、食材供給に関して、個々のお店の支援ができるかとなると、直接個別の店の利益に繋がることを支援するといったら、なかなか行政として難しいところはありますが、少し確認は必要ですけれども、本庁農林水産部の方で、地元の食材を積極的に使っているお店を認証する制度がありまして、岩手地産地消レストランという格好で、地元の食材を積極的に使ってるところを認証し、それらを県内に広く PR することで、地元の方々に気付いてもらうきっかけだったりとか、利用を促してもらうような形で、またそれはその認証を取ることによってお店の PR にもなりますので、そちらも兼ねたような取組をさせていただいているところでございますので、そういった形で側面的な支援だったりとか、地元の食材を積極的に使っていただくといった形の取組は、今後も続けていければ良いかなと考えています。

【瀧澤地域振興センター所長】

先ほど少し白樺のお話ありましたが、二戸の南部美人さんの方で、クラフトジンやクラフトウォッカということ今大々的に取り組んでいて、社長さんが前向きにいろんなことをやってる中で、白樺の炭をろ過に活用したジンを作っているということで、それをクラフトウォッカと言うんですけれども、そういう活用の仕方もあるように、白樺自体のいろいろ使い方があるかと思いますので、そういったものを研究していく必要があるかなと考えております。

御所野の関係でございますが、受入体制の整備はやはり振興局も課題というふうに認識しております。来年度、面的な連携ということで、人的な交流も含めて、鹿角地域、或いは八戸地域と、先駆的な活動してる御所野少年団という団体もあるので、御所野少年団に限定す

るわけではないですが、そういった御所野に関わる皆さんと鹿角の同じような活動をされてる方々の交流等を深めながら、受入体制をより充実させていく、或いはその連携を図って広域で他県の遺跡と一緒になって誘客促進が図れるような取組を進めていきたいと思っております。ハード整備ということで、一戸町さんでは、道の駅とかいろいろ整備計画を検討してどんどん進めているところだと存じていますが、振興局としても参画させていただいて、意見を伺ったり言わせていただいたりして、その施設の整備の効果が上がるように協力して参りたいと思います。

青森鉄道については、私も少しチラシを見たらかなり充実した取組をされてるということで、IGR さんの方でも一戸町だけじゃなくて、このエリア全体の誘客の起爆というような捉え方をしていまして、IGR まつりというイベントもございますが、誘客に向けたいろんな企画の検討を進めていて、新年度についても検討進めてるところです。そこに振興局の方も入って、いろいろこの地域全体に、御所野の登録効果が及ぶような仕掛けを考えているところでございます。その場合、バス会社もありまして、やはり関心を強く持っているっていうことでバス会社とも連携した取組を進めたいなということです。

SDGs という視点での取組ですが、新年度に向けて、やはり御所野の価値の一つである、SDGs 的な生活様式なり暮らしだったというところを魅力としてきちっと捉えて発信して活用していこうということで、教育旅行はかなり有力な今後取り組むべき分野と考えていますが、SDGs をテーマとした教育旅行誘致に向けた取組として研修会から始まっていくのかなとは思いますが、そういった取組を盛岡広域振興局と連携して、一緒になって取り組んでいきたいということで予定を立てているところです。

【小松委員】

令和４年度の地域振興プランに関して、９番のところにある乾燥しいたけが震災の風評被害の影響で価格が下がってしまって、結果的に生産が少なくなってきていると記載がありましたが、6 年ほど前に県庁の農林水産部の担当の方から、そのしいたけで何か商品を作れないでしょうかと提案を受けまして、当社で運営している自助工房四季の里で、しいたけを使って、もち米は全部岩手県産のものを使って、おこわにしてお店で提供していました。それを３年ぐらい前から通信販売でも販売しまして、どんどん買っていただけています。決して安くはないですけれども美味しいということで、リピーターで買っていく方がどんどん増えているという状況です。また、去年から毎年冬に蕪みたいな大根があるんですけど、その漬物をもう何年も前から足沢の方で作っていただいて漬け物を売ってるんですが、ワンシーズで 2,000 から 3,000 パック売れるんですね。また、大根を今度つくだ煮にして、通信販売で売っていくっていうことで去年から販売してるんですが、去年も 1,500 パックぐらい売れまして、今年はさらにもっと売れてるんですが、地元にある食材を付加価値をつけて作ること

で、その農家さんとかに還元していくという方法があるんじゃないかなと思うのが一つです。

あと、観光のところでは、今、全国にたくさんある綺麗な景色、例えば二戸から久慈に行く渓流のところも紅葉がすごく綺麗ですし、二戸市にも石割桜が実はあって、それを知ってる人は実は結構少なかったりするとか。そういう地元の人しか知らないような美しい景観が見えるツアーを、バス会社や IGR とかに提案してツアーを組んでいただくというのも、これからコロナがだんだん収束してきたときには、都会の人は田舎に来て、そういうのを体験してみたいのではないかなと感じました。さらに、自然を生かしたキャンプやグランピング、自然を感じられるようなアスレチックなどがあると、お子様連れでも楽しめる場所が提供できるんじゃないかなというのは、個人的には思ったところです。

あとはこのプランについて、過去にもたくさんのいろんな計画が立てられているんですけれども、これが計画されて実施されたということは、住んでいるところの人たちに伝わらないっていうところが問題じゃないかなと思っています。特に若い人には、知らない人が多いのではないかなと感じているので、伝えていく。それを紙じゃなくてオンラインで分かるように簡単に情報が入手できるようなものがあると、県北ではこういうことをしてるんだというのが、自分たちが住んでるところではこういうことが予定されてるんだっていうのが分かると、それぞれの楽しみの一つにもなっていくんじゃないかなと思いました。以上です。

【古舘（拓）委員】

食産業の振興について、この北岩手の地域には山の食材、海の食材と本当に良いものはたくさんあります。ブロイラーの製造も盛んなので、地域のものを活かした製品というのはいろんなものができると思います。製麺所でメーカーなので、素材を生かしたものを作るということもできるのですが、まだ自分自身でも北岩手にどういうものがあって、どういうふうに使えるかってのはまだわかってない部分が非常に多いので、振興局さんとかで、地場の食材などを取りまとめて、製造業者を結びつけるポータルサイトのようなものを作っていただければなと思います。以前、振興局さんでメーカー製造業を集めて、ここでこういうことができますみたいな一覧の冊子を作っていただいたと思ったんですけども、あれを製造業だけでなくて、一次産業の農業や漁業でそういう素材を提供してくださる方も全部集めて、自分たちが調べて、こういうものがあったらこういう製品に使えるというのを調べるサイトがあれば大変助かると思います。平成 29 年に普代村と大野と軽米町で、岩手県北 3 大麺というものを作ったんですけども、それは普代の昆布、大野のほうれん草、軽米のエゴマを使った麺を作るっていうことを、町の人に聞いたら、県の主導でその三つの町でやったという話を聞いたんですけども、なぜか麺を作ったのは県南の業者で、県北にうちもあるし、一戸にも戸田久さん、九戸にもさいとう製麺さんがあるのに、一言も声がかからずに何故か県南の業者が一括で請け負って作って、それを大々的に PR したことがありました。うちの PR が足りな

いのかなと反省した次第でありますが、地元のメーカーを使って地元の特産品を開発するという形を、ぜひ振興局主導でやっていただければと思います。

あと１点、これは苦情というか、保健所の環境衛生課の方に一括表示のお願いをよくするんですが、この前、大野の方が販売者で私が製造者の一括表示の確認を、大野の方が販売者なので大野の方に頼んで久慈の保健所にお願いしたら、製造者が軽米なので二戸の保健所に聞いてくれと言われて帰されて、こちらで二戸の保健所に聞いたら、販売者と製造者で販売所の方が上にあるから、これは久慈に聞いてくれと言われて、行ったり来たり、久慈と二戸で何が違うんだってこちらは思うので、ぜひその辺は横の連携をとっていただいて、どちらに行ってもすぐ話を通してもらえるような体制をお願いしたいと思います。以上です。

【田口農林振興センター所長】

6 次産業化というようなことの御提言だったと思っております。小松製菓さんのような業者さんから、今のような話をいただけて非常にありがたい話と思っております。昔から農業者の方が余り物を加工していきたいというような御相談があって、取組が少しずつは増えているんですが、やはり最後の加工販売、流通あたりがなかなか難しいということで、専門家のアドバイスをいただきながらやっているんですが、なかなかものにならずに断念される方も多いものです。先ほどお話があったような大根、乾燥しいたけ、特にこちらでは昔から食べられていたものとか、ここでしか食べられないものが結構あると思いますので、そういうストーリー性のあるもの等を含めて、農業者との連携を是非ともお願いしていきたいなと思います。それによって、先ほど言った農業者の所得向上に繋がるということが重要だと思っておりますので、今後とも我々も頑張りますので、引き続きよろしくお願いしたいと思います。

【瀧澤地域振興センター所長】

食材のマッチングっていうことで御提案をいただいてるんですけれども、私どもの方でも、企業訪問に行ってる中で、やっぱりそういったネットワークがあると、いろんな組み合わせで新商品の開発とかがすごく有効だということで、二戸地域に限らず、久慈地域とも、例えば海の食材を扱っている事業者さんなどと連携すれば、もっと良い付加価値の高い商品がつくれるんじゃないかなと提案もいただいておりまして、そういった部分ではPRや情報発信活動をこれまでもやってきておりますが、例えば今年度 IGR の二戸駅のレストランで地域の特徴ある食材をPRするようなメニューの提供で、そういった情報発信等に取り組んできておりましたけれども、やはり取組について全てを振興局の方で把握してその全てを支援ということはなかなかできないので、商品を作ったり、コラボしたりといった機会を作るところを積極的に進めていかなければならないと考えております。古舘さんの方から御提案のあった、

地域の有力な食材などを一覧で見れる、検索できるサイトの整備というのも一つの形だと思いますが、地域の食材の組み合わせによる、或いは隠れたものを掘り起こすという視点で、そういった取組は新年度に向けて強化していきたいと考えております。

【高橋局長】
北岩手三大麺について誰か分かる人いますか。少し確認させていただきます。もちろん地元のメーカーさんとか地元の事業者さんを我々としても盛り上げていきたいという気持ちはありますので、心がけていきたいと思っております。

【加藤保健福祉環境センター所長】
食品の表示の件での苦情いただきました。販売者と製造者があるわけで、どちらにというのは、決まっているものというふうに思っておりますけれども、隣の保健所でもありますし、広域振興局としては一緒ですので、お互いに連携を取りながら、手戻りが生じないように、たらい回しにならないように配慮して参りたいと思います。この度は申し訳ありませんでした。

【高橋局長】
一通り委員の皆様からの御発言と、振興局からのコメントということで進めさせていただきました。それぞれの御提言、御意見、御要望、一つ一つ議論すれば１議論があるということで、十全にこちらからのコメントが御対応できてないということは重々承知しております。今日最初に説明した通り、御意見いただいたものについては持ち帰って検討させていただきますので、御理解をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

〈休憩〉

４　意見交換

【高橋企画推進課長】
〈資料４についての説明〉

【高橋局長】
先ほどのところでも女性活躍、若者活躍支援といった部分について御提言・御意見も頂戴したところですので、この場でお話しいただける方がいらっしゃれば挙手をしていただいて、御発言をいただければと思います。データを見ての感想や自分たちのところではこういうこと考えてやっているといったようなこと、こういうことをやっていく必要があるんじゃない

かといったようなことなど、なんでも結構ですけども、御発言いただける方がいらっしゃれば挙手をお願いします。

【小松委員】

女性活躍についてというところと、あと若者を外にあまり出さないというところですが、海外ではダイバーシティという制度が 10 年以上前から取り組まれていて、それは女性だけではなくてマイノリティー、不平等にならない制度みたいなところから始まったんですが、日本では人口減少があって、女性の活躍をもっと広げていくというところでダイバーシティに取り組み始めて、日本自体も結構な年数が経ってきていると思うんですけれども、これをやるとすれば企業が本気で取り組まないとできないことだと思います。東京で外資系で働いていた時にダイバーシティというのが会社の中で取り入れられて、女性の中で幹部候補生が何人かピックアップされて、その人たちに教育をして役員にしていくというステップをつくるというのは、会社自体で取り組んでいくというもので、ダイバーシティというのがだんだん浸透していきたところを見てきたんですけども、そのぐらいやらないと、ただ女性を活躍させましょうというような言葉だけでは多分上手くいかない。企業に積極的に取り組んでもらわないと、これは実現できないんじゃないかなと思います。

あと、若者が外に出ていってしまう、特に女性が出ていくということですけれども、大学に行ってそのまま留まるという人が多いのかなと思いますが、進学しないで就職を二戸とか地元でして、やはり若いので自分の未来に可能性を色々見出して急に都会に行きたくなったり、急に絵の勉強とかファッションの勉強とかしたくなって、いろいろチャレンジするために都会に行きたがるということが我が社でも結構あります。入社して１年～２年くらいすると急に都会にいきたくなるというのが結構あって、若い子は辞める回転数が早くてうちでも困っているところなんですが、方や一方で最近よくあるんですが、40 代くらいの特に男性が、親の世代を見なくちゃいけないということで、東京で働いてた人たちが完全に地元に戻ってきて地元で就職を探すということが、男性に限らないですが応募をしてくる方が最近見られるようになったなと感じます。何が言いたいかというと、若い人を外に出さないというのはやはり難しいと思うので、U・I ターンのところに注力するべきではないかなと思います。都会に住んでいた方だからこそ、自然がたくさんあるところが良いとか、農業をしたいとか、若者にいま農業が良い職業として流行っているということもありますので、そういう受入態勢を作っていくとか、お試しでこっちに住んでみるプランを立てて、お試しで住んでみて実際に東京から戻ってきた人たちと話をする場を設けるとか、住んだらどういうふうにここで生活できるかというのをその方々が画を描けるような、不安材料がなくなるようなことをしていくことが必要だと思います。以上です。

【山下委員】

農業を志す方にとって、やはり不安材料というのがリスクとしてあるんですが、いま収入保険という制度がありますが、これは非常にありがたい制度で安心感がある。どうしても農業というのは不安定要素が、博打的な、どんぶり勘定的なところがある中で、収入保険というのは経営の面でリスク回避できて非常に安心感がある。これは「守り」という感覚があるわけです。でも守ってばかりいると、「攻め」のところ、先ほどの魅力というところと関連しますけど、やはり「攻め」の項目にチャレンジしよう、規模を拡大しよう、こういう野菜を作ろう、こういうお店とタイアップしてやってこう、こういう取引を始めようというような「攻め」をやるためにも、やはり「守り」の部分で安心感というところをきちっとしていかないとならない。この収入保険の問題点は、掛金がどうしても高いところ。特に一年目というのは基礎部分というのがあって、もし収入保険をやめた場合にも本人に返ってくる場合もありますので、そこは別として、掛捨て部分とかそういったところがやはり規模が大きいところはそんなに負担は感じないでしょうけど、小さい個人経営だとなかなかそこに踏み込むにはハードルが高く感じていると思います。その掛金の部分をいくらか補填するなり、バックアップする仕組みを作ると、新たに農業を志す方にはすごく安心感があって、次のステップでチャレンジするときのスピードが増すんじゃないかなと思います。

そういったところで切り取った政策だけではなく、体系立てて、どう育て上げていくかという戦略的な政策が重要なのではないかなと今のお話し聞きながら、人材が県外に行っているわけですから、その人材を取り戻すというか、やはり県北で活躍してもらう場を戦略的に考えていただきたいなと感じていました。以上です。

【藤織委員】

資料を見ていて、就業率が高いのは良いことだなと思いながらも、労働時間が長いのがすごく目立って見えておりまして、これはつまり働かないと食べていけない状況にあるんだなと思うのと、企業側も人を雇えなくて、一人に対する負担がすごく大きいのかなといろいろ想像はしました。最低時給が上がれば、それはそれでありがたんですけれども、中小企業さんはかなり厳しいのかなというところで、具体的ではないですがそういった支援をしていただきたいなと思うところであります。

あと私も地域おこし協力隊を卒業して起業した身なんですけれど、今コロナもあってフリーランスで働いたり、主婦の方とかが起業してパソコン一台あれば稼げる時代にもなってきているので、そういった自由な働き方とかもどんどんできるのではないかと考えていました。私自体も久慈市でシェアオフィスをできたらいいな、なんてことをいろいろ考えてはいるんですが、これからインボイス制度とかが始まったりすると、私のような小企業でやっている者としてはかなり痛いなというか、どうやっていけばいいのかなと悩むところです。地域お

こし協力隊とかでせっかく挑戦してフリーランスでやっていこう、起業していこうとしても、なかなかそれがあると苦しいなと思うところがだんだん増えてくるんじゃないかなというところが、県政でどのくらい支えて頂けるかわからないんですが、なかなか挑戦するのが苦しい時代の背景とかもあるのかなというところを、ぜひ支えて頂きたいと思います。

【川代委員】

藤織さんがお話したように、やはり就業時間と生活の質、この２つは密接なような気がします。心の健康というところを考えたときに、ゆとりのある時間、もちろん地域にあって欲しいです。そのためには、こうやって御苦労されて知恵を出し合ってということですが、もう一つ、自由な時間ができたときに、その女性が第 2 の人生とか、新しい世界に飛び込むための準備というか、そういった研修とか、趣味を広げる、或いは次のお仕事をみつけるようなチャンスをもつことができるような勉強会やワークショップ、そういったものを小さいところから、少しずつ増やしてっていただいたら、何かしらそれを本業に持ち帰ることができて、その女性の心の輝きみたいな、拠り所みたいになったりできればなと感じました。

【野田委員】

私も一度東京や仙台に出た方が良いと思っている派なのですが、高等機関がないというのは仕方ないことなので、一回外出て勉強して戻る U ターンの人、戻ってきたいなと思う地域づくり、魅力的な企業や、私どものような社会福祉法人が多く存在する地域になりたいと思っております。その点では、私たちも先進的な福祉業界としてどんどん新しいことに挑戦しているんですが、それでもやっぱり洋野町の大野地区の老人ホームと言っても分かる人が正直いないですよね。そういう点では、学生さんの時に都会に出てしまっても、帰ってくる方法として、青森県南部町で始めている、特定地域づくり事業協同組合という総務省が管轄している事業というものがあります。私も南部町の商工会でヒアリングとかをしているのですが、特定地域づくり事業協同組合はお試し居住みたいな感じで、南部町は農業が盛んですので農業をやってみたいという方に月給 20 万円を保証するという制度でして、10 年間農水省の予算が付くというものです。20 万あれば都会から農業をお試しでやりたい、働き方もいろんな果樹園とかの農家を渡り歩いて勉強をさせてくれるという制度でして、これを洋野町で使えないかなとちょっと私も勉強中です。こういう制度を上手く活用して、県北地域に戻って来る人や、I ターンで、浜の方の仕事をお試しでやってみたいという人のために、特定地域づくり事業協同組合の制度がこの地域にもあったらいいなと思っています。それに対して県のバックアップする施策が必要ではないかなと提言させていただきます。以上です。

【谷地委員】

皆さんからお話しを聞いて、そうだなと思うところもたくさんあります。仕事をしていてどんな人が欲しいかなと自分中心に考えると、現場労働してくれる人が欲しいほしくなるわけです。圧倒的にこの地域にはそういった仕事が多くて、人材がこれから不足していくんだろうなと思います。方や、外に出ている人たちは何求めて行くかということ考えると、要は現場労働じゃなくて、管理をしたりとか自分で独立してやりたいとか、そういう考えの人が多いのかもしれない。そこのマッチングのずれが大きくあるんじゃないかなと思います。であれば、私たちのやり方も考えながら、要は私たちの仕事の改革をまずしていかなきゃならないと思います。どっちかというとそういったところをまずは県或いは国に推進をしていただければ良いのかなと思います。それを使う人材として、高等教育行ったらこの部分でこの地域には仕事があるよね、というのも見えるようにして、出て学んできてもらって、例えば外で就職して、スキルアップした人材がこの地域に帰ってくるということで、彼らが独立していくようなサポートを私たちが企業人としてもやっていくというところが、一つのものなのではないかなと思います。

あと、女性の部分で言えば、どうしても子供、出産というのが入ってきます。そういった部分で、働く時間とか場所とかっていうのを固定させないで、コロナ禍でテレワークとか普及しましたから、そういった部分を活用しながら、時間等含めて自由に働いていける場所を作っていくのも一つなんじゃないかなと思います。せっかく就職したわけですから、一緒になって今ある課題を、国、県だけじゃなくて自分たちがもっと主体的に考えて解決していくところを、みんなでやってかなければならないです。1 人だけではできないし、いろんな人、企業、その当事者も含めて、どういった課題があるのか把握して、解決していく場所が必要なのではないかと思います。もう目の前に人が少なくなっているわけですので、やってかないとならない。それをやっていくのは私達だし、若い人たち、また女性の方も、それだけじゃないかもしれないですよね。40 代、50 代で当時就職できなかった人たちとかもかなりいます。そういった人たちを社会に出してくる方法も考えていかないとならないかなと思いますので、是非とも皆さんから聞きながら、もっともっとやっていく方法が私たちにはあるのではないかなと思ったところを発言させていただきました。

【高橋局長】

それぞれ良いお話をしていただきましたので、一つ一つ議論が出来ればと思っていたところですが、時間の関係で私からコメントさせていただきます。

この地域は残念ながら高等教育機関が少なくて、もちろん高卒で地元に就職される方もいらっしゃいますが、やはり一旦外に出てしまうというのが現状かと思っておりまして、その人たちがやはり若いので当然自分の人生を考えれば、やりたいことをやりたいし、都会に憧れはあるでしょうし、スキルアップもしたいでしょうしといったところもありますので、そ

れを止めるというのはなかなか難しいことだろうなと思っております。一方で、そういう人たちが勉強や経験をした中で地元に戻ってきたいなという部分を逃さないと言いますか、そういったところを予め意識をしてもらいながら、来るべき時には帰ってきてもらって、或いはそういう縁がない方にもＩターンという形で来ていただいてというようなことを目指して行くことも必要なのかなと思っております。そういうことで、前段でのお話でも御紹介しましたが、高校生に対するそういった働きがけなども始めていたり、或いは野田委員からお話があった、地域で高校と連携した取組が行われているとか、そういったことがあるのだろうと思っております。一方で、その人たちが地元に帰ろうと思ったとき、勉強してスキルを持って帰ってきたときに、こちらに仕事があるのかというところが結構課題になっていると思っておりまして、その部分については企業の方、事業者の方と一緒になって考えていかなければならないと思っているところです。

課題についてはそれぞれ他にもあると思いますし、例えば私ども来年は地域おこし協力隊の OB の方を含めた交流会みたいなものを設けて、現役の隊員の方、或いは OB の方もそうだと思いますけれども、メンター的な部分も含めて交流をしたり、新しい連携とか事業を起こしたり、そういったことを進めていくような取組も行いたいと考えているほか、洋野町と普代村の方にはワーケーションの施設ができましたので、それらを活用してモニターツアーを組んでみたりしながら、Ｉターンなども視野に入れたようなこともやっていきたいと考えているところです。

今日またいろいろな御意見を頂戴いたしましたので、参考にさせていただいて、今日御説明した来年度の方向性をもっと膨らませて進めていければと思っておりましたので御理解の程お願いいたします。なお、今日いただいた御意見・御要望については、本庁とも相談するところは相談して、フィードバックさせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

５　その他

６　閉会

【佐々木副局長】

それでは以上をもちまして本日の会議を終了いたします。委員の皆様におかれましては、改めまして２年間に渡り貴重な御意見をいただきありがとうございました。

なお、本日御出席いただきました委員の皆様には、後日、御礼の品をお送りいたしますので、御賞味していただきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。